

「一周まわってテレビ」論から “これからのテレビ”を考える

世界で動画配信サービス事業が沸いている。日本でも、テレビの新サービスを巡って行政を巻き込んだ議論が行われている。はてさて、テレビはこの先どうなるのか。「一周まわってテレビ」と明確に指し示すのが電通総研メディアイノベーションラボ統括責任者の奥律哉氏だ。奥氏は総務省の「放送を巡る諸課題に関する検討会」の構成員でもある。

一周まわってテレビ!? 教えて奥さん!

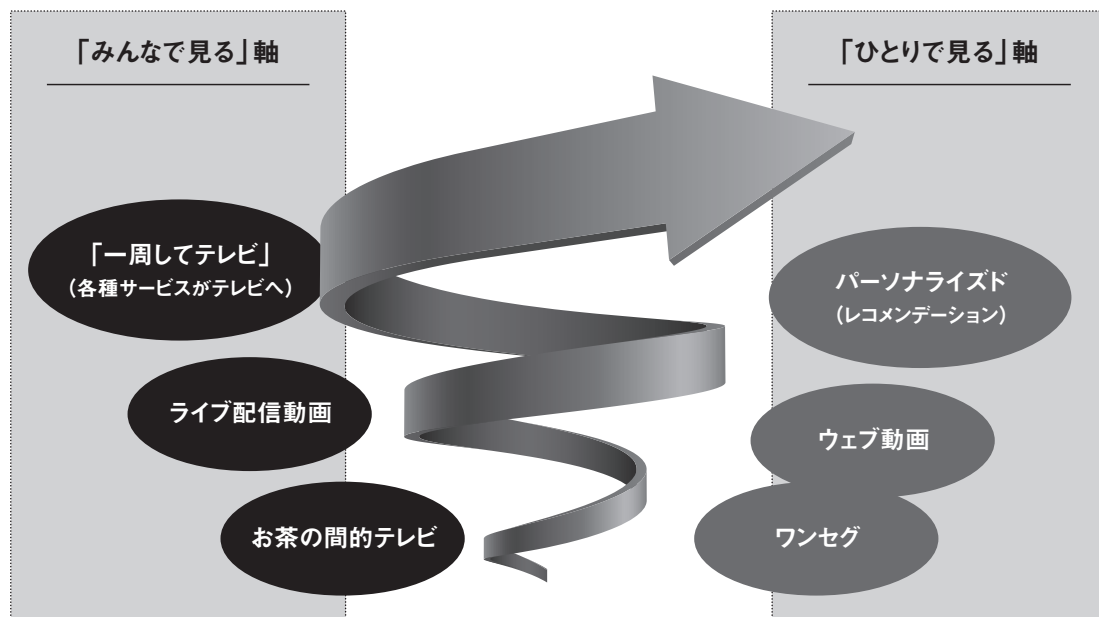
(構成・写真:古山智恵・本誌編集部)



奥 律哉

株式会社電通 電通総研
メディアイノベーションラボ統括責任者
メディアイノベーション研究部 部長

「一周まわってテレビ」論は映像視聴のらせん的進化



映像視聴のらせん的進化

「かつてテレビはお茶の間であって家族や友達と一緒に見るものだった。それがインターネット(以下、ネット)時代になって、携帯電話やPCなどの普及・拡大と共にワンセグやウェブ動画が始まり、動画はいつでもどこでも一人で見ることができるようになった。その後、スマー

トフォン(以下、スマホ)の普及でライブ動画が配信されるようになり、一人で見ながらも、その視聴体験を多くの人と共有するという視聴スタイルが生まれた。サービスサイドでは、視聴履歴を把握できるようになったことで動画のパーソナライズ化が始まった。

このようにテレビを取り巻く環境は、らせん状に回転しながら垂直方向に上昇・拡大してお

り、メディアの価値は複雑化している。私はこうした動向やさまざまな調査から、人々は再びテレビの大画面で見る良さに気づき、テレビの前を選択し始めていると考えている。だから、テレビとネットが代替の関係になると想定するのは違う」と、「一周まわってテレビ」論のコンセプトを電通総研の奥氏は説明する。映像視聴のらせん的進化を表しているのが「一周まわっ